
シリアスを作ってみたけど色々混じって結局デレた

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シリアスを作ってみたけど色々混じって結局デレた

【Nコード】

N0671S

【作者名】

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

【あらすじ】

なんだかシリアスを作るつもりだったのにカオスになった。

(前書き)

一応、コラボの小手調べ的な物と思って作ったのですが……。
僕「何だこのカオスは」
ネタ小説と思ってくれれば幸いです……。

暗く、静まった空間。いや、空間と呼ぶには広すぎるだろうが、『彼ら』には関係ない。

彼らを照らすのは、今宵の月だけ。

そして『彼ら』はクスリと笑い、いつものように作業を始めるのだった……。

いつものように作業は終わる……はずだった。

急に何かかん高い音が鳴り響いて、どこからともなく男達の足音が集まってきた。

そして屋外灯が照らされ、軽く目眩がするくらいに明るくなる。

この一連の動作は、迅速かつ的確に行われ、正直、僕は負けを覚悟していた。

だが、あいつがコッチを見た時には、もうやることは把握していた。

「お前ら！　ここで何をしている！」

そんな声をよそに、僕たちは目を合わせてタイミングを計る。

ここで捕まる訳にはいかないのだ。絶対に。

僕は自分の中でそう再確認すると、あいつにもう一度、目で合図を送った。

「さあ！　ショータイムだ！」

僕はバカみたいにそう言い残して走り去った。

さあ……、どうするか。

たしかに僕はここまで逃げ切ってきた。だが、今日はうまくいくとは限らない。

場所は屋外、雑草が生い茂る畑。時間は朝方の1時。暗闇を味方にして逃げている僕らにとって、夜明けは実質タイムオーバーだ。

それに、今日は僕もこいつも大した道具を持ってきていないのだ。うまく雑草を武器にすれば……。

「ちよつとー、何かないの？　じゃないとまた汚れるじゃない！　テレビに出る人間としてこれはどうなの？」

彼女、常葉とこは　美紀みきは売れないアイドルなのだ。現役高校生で。

そんなアイドルが気安く話しかけてくれるのは、この僕、蜂野はちの領介りょうけいに幼なじみという立場と、マネージャーという立場があるからなのだ。

が、常に自分の立ち位置を呪いたくなるくらい忙しく、かつ報われないので相当な根気と忠誠心（これはあいつに教えられた）がないとやっていけないお仕事なのである。

（一応、バイト、と言う立ち位置だが、彼女もそんなに売れていないので、正式には誰もいない事になっている）

何か無いかな……？　とポケットをあさっていると、見慣れた手帳が現れた。

何の気なしに、スケジュール確認ついでにパラパラ……、と手帳をめくる。

悲しいかな、職業柄、どんなピンチでもアイドル（のスケジュール）が最優先らしい。この先、死ぬ間際になるうとも僕は彼女のスケジュールを気にしないとイケないのか……。とても残念で仕方がない。

「危ない！　上からネットが！」

僕が自分の人生を憂いでいると、彼女に横から突き飛ばされた。

慌てて手帳をしまい終えるのと、視界が逆さまになるのがほぼ同時くらいであった。

後ろを振り返ると、まえにテレビで見たような泥棒対策用のネットが雑草の上にならしく広がっており、彼女が驚いている。

「まさか……、私たちが常習犯なのは分かってるだろうけど、こんな物まで導入してくるなんて……」

別の方向からも、ネット放出機らしきバズーカを手を取った男達

が走ってくる。

「ボヤボヤしてる暇はない！ ほら！ さっさと走れ！」
僕らはまた走り出した。

「あの……、さ、アレ使えないの？ そうそう、草むすび！」

確かに足下には雑草が生い茂っているし、その雑草はかがまないと見えないくらい暗い。たしかに、ぴったりの状況だと言えよう。

だが、実際アレは時間と手間がかかるので、陽動役がいないと無理なのだ。

現在、僕たちがやるとするならば、手先の不器用な彼女は草を結べない。 かといって、アイドルに陽動を頼むのは気が引ける。

「ダメだ、今の状況じゃ難しすぎる」

「じゃあ、どうすればいいの！ あんた考えなさい！」

できるならとつくの昔にやってるよ！ ……と言おうとしたその矢先、一つのアイデアが頭をよぎる。

地面に生い茂る草、これがキーポイントだ。

「ねえ、香水持っていない！？」

「なんで現役高校生に香水なんか……」

「持つてるの？ 持っていないの？ 早くしてくれ！」

「あるけど何に使うの？ 女物だけど？」

怪訝な表情をした彼女の手から香水を受け取り、ガラスの蓋を片手で外す。

もう片方の手でポーチをあさる。

それと同時に彼女に向かってこう叫ぶ。

「いい？ 僕が合図したら後ろを振り向かず逃げるんだよ！」

「え……、それって……」

彼女が何か言いたさげだが、周囲がほんの少し明るくなってきている。もう時間がない。

僕は香水を思いつきりそこらじゅうに振りまいた。

「逃げる！」

そう言って彼女を先に進ませる。よし、ここなら彼女に被害はなさそうだ。

男達がどよめく中、僕は百円ライターをバッグから取り出し、火を付け、投げつける。

瞬間、草むらから大きな炎が上がる。

僕は心の中でガッツポーズをしながら、彼女を追いかけるのであった……。

炎で攪乱されたのか、僕が彼女に追いついた時にはもう誰も追って来ていなかった。

いつものように始発の電車の中で、彼女は疲れ切った僕に話しかけてきた。

「あ、あのさ！　なんであんなに草が燃えた訳？　朝露が邪魔で逆に燃えないんじゃないかと……」

「見てたの？」

僕が顔をしかめると、彼女は取り繕うように、

「きゅ、急に後ろが明るくなったから、アンタが心配で振り返っただけよ！」

そう言う彼女の顔は、炎に照らされてる訳でもないのに赤くなっただ気がする。

僕は手帳で彼女のスケジュールを再三チェックしながら、横目でこう言った。

「あ、ありがとう……」

僕はまた手帳に目を落とし、ボールペンで今日の日程をまとめる。そこから僕たちは、他の客がほとんどいない中でしばらく無言の時を過ごした。

目的地の一つ前の駅に着いた時、彼女が思い出したように口を開いた。

「あ！　そうだ！　なんで草が燃えたのか聞いてなかったよね！　教えて！」

僕はボーツつとしながら、こう答えた。

「たしか昔、香水で何かを燃やす洋画を見たんだよ、それで、燃やせないかな？　と思つて。賭けでやってみた」

「あと、香水、弁償してよね！　どうせ今日の午前は空いてるんでしょ？」

僕は、ただそれに頷くしかなかった。

「それに、二人で一緒にシヨツピングもしたかつたし……」

その時、僕は見逃さなかつた。

彼女が、撮影の時に見せる　　いや、それ以上の笑顔を。

(後書き)

「……ところでさあ、いつになったらネギ泥棒やめるの？」

「やめない！」

「あれは首領　ツチソードでも歌姫の小道具でもないって言ってるじゃん」

「でもさ、やめられないんだよね。なんて言うのかな？　ロマン」

「その程度でロマンは語らないでくれ」

今日も『彼ら』はネギを盗む。

何かすみませんでした。

一応これ、ギャグかな？　と思ったりします。(元ネタが悲惨な事になってますが)

……すみませんでしたm() () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0671s/>

シリアスを作ってみたけど色々混じって結局デレた

2011年3月31日19時55分発行